

令和7年度 理科 授業改善推進プラン

大田区立入新井第二小学校

1 昨年度の授業改善推進プランの検証

(1) 成果

- ・第4学年では、「音のせいしつ」で区の目標値を6 p t以上上回る結果となった。また、全体的に前年度よりも「思考・判断・表現」の項目において正答率が上昇した。
- ・第5学年では、理科用語を振り返りながら指導したこともあり、「知識・技能」、「思考・判断・表現」のどちらの観点においても、区の目標値を上回った。
- ・第6学年では、考察やまとめに重点を置いて指導したこともあり、「思考・判断・表現」の観点において区の目標値からは下回るものの、前年度に比べて上昇傾向が見られた。

(2) 課題

- ・第4学年では、「音のせいしつ」をのぞいて区の目標値を下回る結果となった。特に、「じしゃくのせいしつ」で目標値よりも15ポイント以上低い数値になっている。
- ・第5学年では、区の目標値とほぼ同等か上回るものが多い中、「物のあたたまり方」においてだけは、目標値より4ポイントほど低い数値になっている。
- ・第6学年では、「知識・技能」と「思考・判断・表現」どちらの項目においても、8ポイント以上低い数値になっている。

2 大田区学習効果測定の結果分析

(1) 達成率（経年比較）

	令和7年度結果	令和6年度結果	令和5年度結果
第4学年	知識・技能▽ 思考・判断・表現 ▽		
第5学年	知識・技能△ 思考・判断・表現 △	知識・技能 △ 思考・判断・表現 ▽ (第4学年時)	
第6学年	知識・技能▽ 思考・判断・表現 ▽	知識・技能 ▽ 思考・判断・表現 ▽ (第5学年時)	知識・技能 ▽ 思考・判断・表現 ▽ (第4学年時)

(2) 分析（観点別）

① 中学年

知識・技能	思考・判断・表現
4年生 ・「身近なしぜんのかんさつ」や「こん虫の育ち方」における基礎的理解が低い。校舎改築に伴って身近な自然に触れづらいことが影響していると考えられる。 ・「音のせいしつ」においては、9割に近い児童が正答しており、音が出ているものについて十分に理解できている。	4年生 ・「じしゃくのせいしつ」では、9割以上の児童が誤答しており、磁石の性質や磁石の極について十分に理解していないといえる。 ・記述問題においてはどの問題においても2割程度の児童が無回答である。

② 高学年

知識・技能	思考・判断・表現
5年生 ・「1年間の動物のようす」において9割以上の児童が正答しており、気温と動物の活動の様子について深く理解できている。 6年生 ・「ふりこのきまり」において、ふりこの対照実験については十分理解しているものの、ふりこの振れ幅を理解している児童は2割程度と低い結果であった。	5年生 ・「物のあたため方」では、金属の温まり方の問題において誤答が多く、単純な結果などは理解しているが既存の知識から考察することができていない。 6年生 ・正答率は高くないものの、記述問題を含め、無回答の児童は少なかった。その中でも「流れる水のはたらき」においては、実験結果をもとに推測することができていた。

3 授業改善のポイント（観点別）

（1）中学年

知識・技能	思考・判断・表現
4年生 ・単元が終わっても繰り返し理科用語の確認が必要である。 ・改築の中でも、様々な事象に触れる機会を多く持つようにし、経験を伴った知識を身に付けられるよう指導を行う。	4年生 ・「じしゃくのせいしつ」では、磁石の性質について学んだことを振り返るとともに、極についての考察をしっかりと行うようにする。 ・実験結果同士を比べたり、結果や気付いたことから考察したりする機会を増やす。

（2）高学年

知識・技能	思考・判断・表現
5年生 ・実験器具の正確な使い方や名称を理解させ、単元終了後も振り返りを行う。 6年生 ・実験器具の正確な使い方や名称を理解させる。単元終了後も振り返りを行う。 ・理科用語を確認しながら授業を行い、確実な知識の定着を図る。	5年生 ・既習事項から実験結果を予想する活動を通して、推測する力を育てる ・日頃より文章で記述する機会を増やし、伝える力を今後も高める。 6年生 ・予想から実験や観察方法を考えさせる場面を増やす。実験計画を立てる際は、既既習事項を想起させ考えさせるようにする。 ・根拠のある予想をたてることができるよう日々指導を行うとともに、予想に対しての考察を自分の言葉で書くことができるようにする。 ・日頃より文章で記述する機会を増やし、伝える力を高める。